



[野菜部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

7. 岡山県のイチゴ栽培における薬剤耐性炭疽病菌の発生状況

[要約]

岡山県内のイチゴ産地において、Q o I 剤（アミスター20 フロアブル及びファンタジスタ顆粒水和剤）に耐性のイチゴ炭疽病菌が高率に発生している。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 病虫研究室

[連絡先] 電話 086-955-0543

[分類] 情報

[背景・ねらい]

県内のイチゴ産地では、炭疽病対策として薬剤を基幹とした防除が行われており、耐性菌の発生による防除効果の低下が懸念されている。そこで、炭疽病防除に使用されている薬剤について、耐性菌発生の実態を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. Q o I 剤のアミスター20 フロアブル及びファンタジスタ顆粒水和剤に対する耐性菌が調査した県内圃場の73%で発生しており、防除効果が低下している（図1、効果についてはデータ省略）。また、両剤間には交差耐性が認められた。
2. ゲッター水和剤は、ジエトフェンカルブとチオファネートメチルの混合剤であり、ゲッター水和剤の耐性菌は認められず、防除効果は低下していなかった（図1、効果についてはデータ省略）。
3. ベルクートフロアブル及びベルコート水和剤の耐性菌は認められず、Q o I 剤耐性菌への防除効果が高かった（図1、図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 発病確認後に有効薬剤を散布しても、被害を抑えることは難しいため、予防的な散布を実施する。薬液は、株全体にむらなく十分付着するよう、丁寧に散布する。
2. 耐性菌の発達を防止するため、同一FRACコードの薬剤の使用は年1～2回にとどめる（https://www.jcpa.or.jp/labo/jfrac/pdf/code_pdf01_2020.pdf 参照）。
3. Q o I 剤（アミスター20 フロアブル及びビストロビーフロアブル等）を使用する場合には、単剤での使用は年1回、他剤との混用又は混合剤の場合は年2回までとし、他系統の薬剤を組み合わせた防除を行う（[http://www.taiseiki.n.jp/mwbhwp/wp-content/uploads/03_野菜・果樹・茶におけるQ o I 剤及びSDHI 剤使用ガイドライン2018 タマネギ追加.pdf](http://www.taiseiki.n.jp/mwbhwp/wp-content/uploads/03_野菜・果樹・茶におけるQ_o_I剤及びSDHI剤使用ガイドライン2018タマネギ追加.pdf) 参照）。
4. 本病は水滴の跳ね上がりで伝染するため、薬剤散布だけでなく、発病株の抜き取り、雨よけ栽培、灌水時の水滴の跳ね上がり防止など、耕種的防除の徹底が必要である。



[具体的データ]

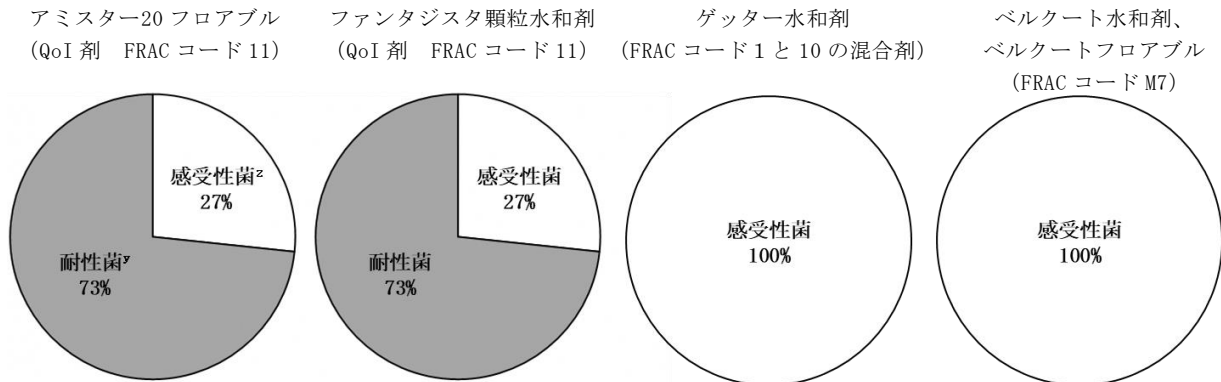


図1. 岡山県内の薬剤耐性炭疽病菌の発生圃場率(%)

注) 県内7市町の15圃場から採取した159菌株を用いた培地検定及びイチゴ葉を用いた生物検定の結果から判定した

^z 感受性菌：感受性の低下は認められない

^y 耐性菌：実用濃度の薬剤に対する防除効果の低下が認められる

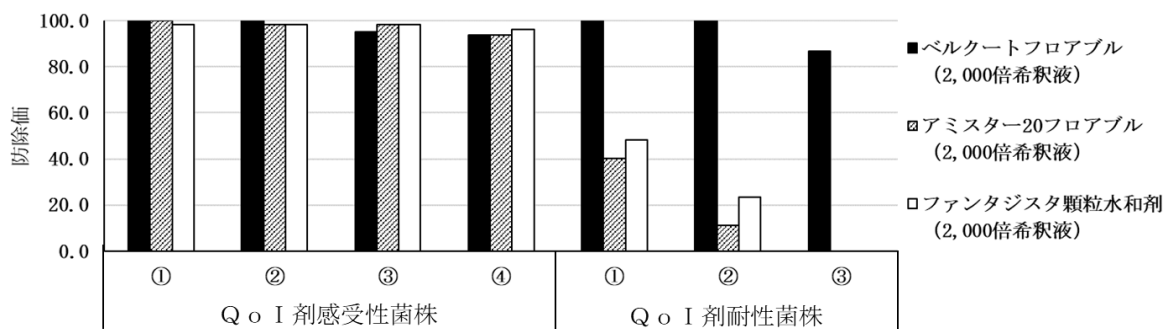


図2 薬剤処理したイチゴ小葉におけるQoI剤耐性イチゴ炭疽病菌に対する各薬剤の防除効果

イチゴ小葉（品種：おいCベリー）に薬剤を散布後、炭疽病菌をつま楊枝で有傷接種し、28℃に設定した恒温器内で6日間培養後の病斑直径を計測し、薬剤無処理区と比較した防除価を求めた試験は1反復で行った

[その他]

研究課題名：主要病害虫の薬剤感受性の実態解明と有効薬剤の選抜

予算区分・研究期間：交付金・令2年度

研究担当者：矢尾幸世、金谷寛子、桐野菜美子

関連情報等：なし